

平成21年 3月 31日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18320044

研究課題名（和文）古代幼学書の発展的研究

研究課題名（英文） The advanced study on the texts for basic education

研究代表者

黒田 彰 (KURODA AKIRA)

佛敎大学・文学部・教授

研究者番号：80178136

研究成果の概要：

本研究は、古代幼学の実態解明に向けて、孝子伝(図)、列女伝(図)、体腔か陽など、未解明の題材を取り上げ、発展的研究を目差したものである。中で、後述日中共同研究による和林格爾後漢壁画墓の未公開の孝子伝図、列女伝図を含む、全壁画の公開報告書の公刊や、太公家教の現存全本の校本と校訂本文の作成、注解などの公刊(『太公家教注解』、汲古書院)を中心とする、学際的特色をもった成果を齎すことが出来た。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	5,500,000	0	5,500,000
2007年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
2008年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
年度			
年度			
総計	14,500,000	2,700,000	17,200,000

研究分野：文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：幼学、孝子伝(図)、列女伝(図)、太公家教

1. 研究開始当初の背景

研究代表者黒田彰及び、幼学の会は、これまで以下の二次に亙る科学研究費の交付を受け(科研1、2と略称)今般三次に当たる研究は、科研1、2のテーマをそれぞれ発展的に継承したものである。

科研1 平成13～14年度特定領域研究(A)(2) 「日中幼学書の比較文化的研究」

研究分担者。420万円(210万+210

万) 課題番号13018238

- 日本に伝存する二種の古孝子伝(陽明本、船橋本)を研究対象とし、その成果は『孝子伝の研究』(佛敎大学鷹陵文化叢書5、思文閣出版、平成13年)及び『孝子伝注解』(幼学の会<代表、黒田彰>、汲古書院、平成15年)として結実した。特に前者のⅡ部「孝子伝図の研究」、また『孝子伝注解』の付篇「図像資料 孝子伝図集成稿」は、

科研1により資料蒐集が可能となったもので、科研2のテーマとして継承される。

- ・日本の伝説、昔話が受容した孝子伝を論じた黒田「昔話と孝子伝—孝子伝の受容」(『論集「伝承と受容(日本)」平成15年3月)は、日本文学における孝子伝受容の裾野の広さを論じた。

科研2 平成15~17年度基盤研究(B)(1) 「古代幼学書の基礎的研究」

研究代表者。1390万円(620万+470万+300万) 課題番号15320032

- ・科研1を継ぐ孝子伝図の研究と太公家教の二つを研究対象とし、前者については黒田の「孝子伝図と孝子伝—林聖智氏の説をめぐって—」(『京都語文』10、15年11月)等が陽明本孝子伝と漢代図像の関連を明らかにし、陽明本の漢代孝子伝としての古態性を確証すると同時に、上記論文とその結論は、本研究における和林格爾後漢壁画墓の調査を導くことになった。
- ・黒田の「武氏祠画像石の基礎的研究—Michal Nylan “Addicted to Antiquity” 読後」(『京都語文』12、2005年11月)が科研2を国際的なレベルの論争へ展開させた。

2. 研究の目的

古代幼学書とは、我が国の古代に舶載され、文学を始め文化一般に多大な影響を与えた文献を言う。具体的には、太田晶二郎氏が「幼学の書は、程度は低いものであるけれども、根柢的な影響を広範囲に及ぼす。高尚なる文芸・思想等に至っても、その史的考察に、当時の幼学書が何であったかを知って、之を考慮に入れる要がある」と指摘した千字文(または新楽府)、百詠、蒙求、和漢朗詠や、「三注」と称された千字文、蒙求、胡曾詩の注などを指す。その特徴は、①故事、成語等

を学び覚えるもの、②詩形態(毎句定字数、有韻)で暗誦に適する、③本文を引っかかりとして、詳細は注として説明されている、と定義されている。(※)

研究代表者の黒田は、この提言を受けて、伊藤正義との共編による『和漢朗詠集古注釈集成』全三巻(大学堂書店、平成元年—平成9年)などを公刊してきた。そして、昭和58年に**幼学の会**を結成し、今日まで古代幼学の研究に取り組んでいる。

本研究の理念は、二十世紀以来行き詰まりが指摘されて久しい日本文学研究を、二十一世紀における人文学の不可欠の一領域として再構築することにある。古代幼学の文献学的研究を通じ、従来のジャンル・作品・作者を中心とする伝統的な日本文学研究を、歴史・思想・美術などの文化史的諸領域にまで学際的に拡大し、新たな役割、意義と価値を付与しようとするものである。

幼学の会は、これまで三次に亙る科学研究費が交付され、下記の成果を公刊してきた(C、Dは研究成果公開促進費)。『孝子伝注解』はその第一次の基盤研究(B)による成果で、それを受けた第二次、三次の基盤研究(B)は、古代幼学の孝子伝と図像の関係の研究をテーマとして、国際的な規模で展開させたものである。

A『上野本注千字文注解』(和泉書院、平成元年)

B『諸本集成仲文章注解』(勉誠社、平成5年)

C『口遊注解』(勉誠社、平成9年)

D『孝子伝注解』(汲古書院、平成15年)

孝子伝、孝子伝図は、西野貞治氏が「家族制度が極めて古くから発達した中国では、その維持のために孝行の教化が徹底され、孝行の実践例を掲げた孝子伝・孝子図などと題する書が、孝経と共に童蒙の必修書とされ、六朝末迄に十種以上も出現した。此等の書が盛

行したことは種々の資料から偲ばれるが、伝存の記録は南宋の鄭樵の通志略を下限とし…南宋の兵燹に失われたものが多いかと考える」(「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について」『人文研究』7・6、昭和31年7月)と言われた古代幼学書の一つで、我が国の万葉集や今昔物語集から、井原西鶴『本朝二十不孝』まで、大きな影響を与え続けたものである。『孝子伝注解』が、文献学的にも図像学的にも世界的なレベルで画期的なものであることは、趙超氏(中国社会科学院、研究協力者)「日本流伝の兩種古代《孝子伝》」(『中国典籍与文化』2004.2)、「關於伯奇的古代孝子図画」(『考古与文物』2004.3)などで広く全中国に紹介されたことにより明らかである。第三次の基盤研究(B)では、(i)未紹介の孝子伝図の描かれた和林格爾後漢壁画墓の研究、(ii) iを含む孝子伝図集成公刊、(iii)太公家教研究、(iv)「海外の幼学研究」公刊を研究目的としたが、なかでも(i)により、最古の孝子伝図を含む後漢武氏祠画像石に対するM・ニランの偽刻説(2005、プリンストン大学美術館刊)の誤りが明らかとなり、テーマ(i)は国際的な広がりを持つに至ると共に、ボストン大学の白謙慎教授の注目、支持を受けた。また、三次に亙る基盤研究(B)の結果、「古代幼学としての列女伝と列女伝図の研究」の重要性と意義が明らかとなった。

一方、孝子伝図集成の国際的発信としての中国語版、英語版の公刊や「海外の幼学研究」続刊と充実が、今後の課題として残されている。

※ 「四部ノ読書」考(『歴史教育』7・7、昭和34年7月。太田晶二郎著作集1所収)

3. 研究の方法

本研究においては、幼学の会として、古代幼学についての従来からの研究を発展的に継承し、以下(1)(2)の二つのテーマの

完成と、(3)(4)の新領域の開拓を目的とした。

- (1) 孝子伝図資料の集成公刊
 - (イ) 「孝子伝図集成」の公刊
 - (ロ) 内蒙古和林格爾後漢壁画墓の研究
 - a 和林格爾後漢壁画墓の全壁画の蒐集公刊
 - b 同墓中の孝子伝図の蒐集公刊
- (2) 「太公家教注解」の公刊
- (3) 国外における古代幼学研究の動向調査
- (4) 新領域の開拓

上記の(1)~(4)の最終年度における具体的な進捗状況は次の如くである。

(1)(イ)については、日本語版原稿が完成、目下英語訳、中国語訳が進行中である。(ロ) a が本年度最大のテーマで、図版原稿が完成、内蒙古文物考古研究所と共同で、三月時点で中国における印刷、校正が進行中である。

b に関しては、黒田の『孝子伝図の研究』(平成19年11月、汲古書院刊)が所期の目的を達成したので、残る中室の列女伝図、列女伝図等の研究が今後の課題となる。

(2)については、その注解原稿(全本対校表、校訂本文と注解、解説、影印用写真)が完成したので、本年度中の汲古書院からの公刊をみた。

(3)に関しては、昨年度公刊した「海外の幼学研究」4冊(後述、5主な発表論文等における、黒田監修⑥~⑨)に引き続き、海外の幼学研究5、趙超「太原金勝村唐墓屏風式壁画と唐代孝子伝図」の校正が進行中である。

(4)については、幼学の会として北魏司馬金竜墓出土屏風の解読を開始した。当該屏風は孝子伝、列女伝等を内容とする古代幼学の資料として、極めて貴重なものである。同時に(3)を通じ、幼学研究の将来的可能性を探ろうとした。

4. 研究成果

本研究における具体的な成果は、5、主な発表論文等に掲げた通りである。以下、それらの具体的成果について、3、研究の方法に掲げた(1)~(4)の項目に従って簡単に説明する。

(1)に関する黒田⑤、⑩は、孝子伝図研究の基礎となる武氏祠画像石の基礎研究において、米国のニラン女史による、その偽作説に反論する。

(1)(イ)は目下、英訳、中国語訳が進行している。

(1)(ロ)に関わる成果として、黒田③④、また⑩(⑩はその結章)が上げられ、特に(ロ)a は、目下中国における公刊を目差し、校正が進行している。

(2)について、幼学の会が総力を上げた①『太公家教注解』の刊行が果たされた学問的意義は、黒田⑩論文における太公家教諸本の系統化を受け、始めて全本を校合、最良の校訂本文と詳細な注解が施された点、また、求め得る最良の写真に基づく影印の付された点など、極めて大きいものがある。黒田②論文は、その大谷文書の系統を明らかにしたものである。

(3)(4)は、幼学の会編、黒田監修に掛かる「海外の幼学研究」1～4(⑥～⑨)。5は校正中が、二十一世紀における幼学研究を基礎付け、今後の学問的領域確立において、その学的視点を提供するものとなっている。特に(4)に関しては、昨年度から、中国六朝美術を代表する逸品の一、孝子伝図、列女伝図などを内容とする北魏司馬金竜墓出土屏風の会説を立ち上げ、その学際的解明が進行中となっている。

その他、黒田⑬⑭、三木雅博①の論文は、古代幼学と日本文学との具体的関係を論じ、幼学の文学史的位置付けの再考を促すものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① 黒田彰「大谷文書の太公家教—太公家教攷・補—」(佛教大学『文学部論集』93、査読無、2009年3月)
- ② 黒田彰「列女伝図の研究—和林格爾後漢壁画墓の列女伝図」(『京都語文』15、査読無、2008年11月)
- ③ 黒田彰「李善図攷—孝子伝図と孝子伝—」(佛教大学『文学部論集』92、査読無、pp1-11、2008年3月)
- ④ 黒田彰「武氏祠画像石の基礎的研究(二)—Michael Nylan "Addicted to Antiquity 読後—」(『総合人間学叢書』3、査読有、pp39-56、2008年1月)
- ⑤ 黒田彰「陽明本孝子伝の成立」(『京都語文』14、査読無、pp57-136、2007年11月)
- ⑥ 黒田彰「武氏祠画像石は偽刻か—Michael Nylann "Addicted to Antiquity" への反論」(『説話文学研究』42、査読有、pp78-91、2007年7月)
- ⑦ 黒田彰「餓鬼草紙攷—曹源寺本第三、第四段について—」(関西大学『国文学』91、査読無、pp87-104、2007年3月)
- ⑧ 黒田彰「金玉要集と孝子伝—孝子伝の享受—」(『京都語文』13、査読無、pp77-97、2006年11月)
- ⑨ 黒田彰「太公家教攷」(『日本敦煌学論叢』

1、査読無、pp1-76、2006年10月)

- ⑩ 三木雅博「『竹取物語』と孝子董永譚—日中天女降臨譚における『竹取物語』の位置づけの試み」(『国語国文』76・7、査読有、pp1-25、2007年7月)

[図書] (計 6 件)

- ① 幼学の会『太公家教注解』黒田彰他(汲古書院、2009年3月)
- ② 黒田彰「黄易とその友人達の残した知的遺産」(海外の幼学研究1、監修、93頁、2008年3月)
- ③ 黒田彰「太公家教」(海外の幼学研究2、監修、48頁、2008年3月)
- ④ 黒田彰「ボストン美術館蔵北魏石室について」(海外の幼学研究3、監修、27頁、2008年3月)
- ⑤ 『無私の孝子』(海外の幼学研究4、黒田彰監修、299頁、2008年3月)
- ⑥ 黒田彰『孝子伝図の研究』(汲古書院、887頁、2007年11月)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒田 彰 (KURODA AKIRA)
佛教大学・文学部・教授
研究者番号：80178136

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

後藤 昭雄 (GOTO AKIO)
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：80022284

三木 雅博 (MIKI MASAHIRO)
梅花女子大学・文化表現学部・教授
研究者番号：70165992

山崎 誠 (YAMAZAKI MAKOTO)
国文学研究資料館・教授
研究者番号：70094696